「経営学論集」，第19巻　第1号，1-16，2008
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *KEIEIGAKU RONSHU*（*BUSINESS REVIEW*）Vol. 19, NO. 1, 1-16, 2008

〔論　説〕

日本の代表的グローバリスト・大来佐武郎

—日本の国家経営という意識

伊　藤　重　行

[INTRODUCTION]

In this paper the author tries to introduce the late Dr. Saburo Okita (1914-1993) to the general public who had contributed to create and manage a new Japan after World War II. Even though a great and prominent figure after the Second World War he was really a second globalist led to democratize and develop the entirety of Japan after the first globalist of John Manjiro led to open the door of Edo regime in a Japanese history. The great works of Dr. Saburo Okita included serving at the United Nations as a first Japanese, compiling to issue the first White Paper in a Japanese history, coordinating international meetings of conflict resolutions as a globalist, and serving as Minister of Foreign Affairs in Japan. He was a tough negotiator solved big issues between nations, and a warm-hearted gentleman coordinated and resolved to global issues among countries. We never forgot his great works to initiate and coordinate new Asia-Pacific organizations of Pacific Economic Cooperation Council (PECC) and Asia-Pacific Economic Cooperation (APEC).

日本の近代史から現代史まで考察して見る中で，本格的なグローバリストは多くいない。多くの場合は，各藩や国家の政府代表者として国家経営に携わったのであり，職務をこなしたに過ぎない。筆者の眼では，日本の最初のグローバリストは，ジョン・万次郎である。彼は，日本の江戸幕府の閉鎖的傾向の政策に間接ながら世界や地球の姿を実体験を通じて教示し，多くの藩の若者にグローバルな情勢を伝え，結果的に日本の明治維新となり，日本の国際化を実現した。三菱財閥を作った岩崎弥太郎もその若者の一人であった。日本の二人目のグローバリストは，大来佐武郎（おおきたさぶろう）を揚げたい。彼は日中戦争，朝鮮半島の日本の植民地化，第二次世界大戦の中で生き，それらの原因を研究し，日本を世界の中で指導的にして平和裡に生きることを意識して戦後の国家経営に参加したグローバリストであった。彼は国家の最高権力者から常に距離を置きながらも，正義ある国家経営の政策と運営を意識して生きた人物であった。

振り返って見れば，明治維新以前は，ジョン・万次郎，明治維新以降は，大来佐武郎と要約できるであろう。明治維新以降，先進国の米国，英国，ドイツ，イタリア，オランダ，フラン

スなどから多くの専門技術者，教育者を日本に招待し，日本の富国強兵政策実現のために教えを受けた。日本は，国力の増強と共に先進国と同じ帝国主義への道を歩む。第二次世界大戦の末期に米国との対決となり，日本の敗戦に終わった。圧倒的な米国の実力を見せつけられた日本であった。日本帝国主義が軍事国家になり，情報の統制，自由な言論の禁止，国家統制となり，神がかりの精神論に帰着した頃に，多くの日本の若者は，これで本当に日本が戦争に勝てるのか疑問を持った。その中の一人に大来佐武郎がいた。彼は正確な情報を得るための努力を，あの軍国主義の統制の時代に試みていたのであった。彼は国力の基礎的資料の作成，分析，統計資料の正確な記録の必要性に痛感し，科学的手法を使った経済資料の整備に官庁エコノミストとして努力し，また経済政策モデルや数理経済モデルの構築とそれらのモデル作成に精通した多くの後輩を育てた。その一方日本人から世界人として尊敬を受けるグローバリストに昇華していった忘れてはならない人物である。日米関係やアジア・太平洋関係の友好関係の構築，日中関係や日韓関係，東南アジアや中東関係，地球環境の改善に多くの功績を残した人物である。彼は戦争ではなく，現実に平和をどのようにして実現していくシナリオ・ライターでもあった。柔らかい人柄，若者に刺激を与える程の行動力，専門外交官以上の英語力，権力者に媚びない態度など人間の見本を示した人物でもあった。21世紀は平和への転換期であると語り，地球全体の政治，地球社会の到来を教えてくれた大人は，やはり専門外交官以上の役割を果たした民間外交官としての大来佐武郎であった。一時大平正芳内閣の時に，民間から起用された外務大臣の職にあったが，しかし「日本経済に精通した民間外交官であった」がふさわしい表現である。筆者もいろいろな国際会議でお会いしたことがあるが，「ドクター・オオキタ」と呼ばれるだけの人物であった。日本を世界の中に存在感ありと貢献した人物として高い評価が与えられる。江戸期や明治期のジョン・万次郎と同じ役割を昭和期に担った人物である。

一，日本の戦後最初のグローバリスト—大来佐武郎

大来佐武郎の古い著書を図書館で読んでみると本当に頭が下がる思いだ。一夜にして彼がグローバリストになったわけではない。戦後の一年後，昭和21年11月にもう次のように書いているのである。すなわち「現在爆弾こそ落ちてくることはないけれど，戦時中よりも確かに深刻且つ骨身に徹する新たな戦いの中におかれているのである。この戦いに敗れれば日本は将来永く世界の劣後国民として止まらねばならない。此の戦いに勝ち抜くことは自国の繁栄を取り戻すのみではなく，広く世界の繁栄と文化の向上に貢献することとなるのである。日本民族の真の試練は実に戦後の今日にあると云えよう」[1]と記し，日本復興のために日夜努力していたの

である。彼のような真摯な日本人がいたことにまず感謝しなければならない。われわれが毎日おいしい物を食べ，世界の先進国としての責務を感じる。次のような賛美をしても許される。すなわち「大来佐武郎は，日本で戦後最初にグローバルに活躍した世界人であった」と。私の経験では，彼は，どこに行っても，どこの国に行っても「ドクター・オオキタ」として知られていた。日本よりもむしろ外国で熟知されていた人物であった。家でも，職場でも仕事ばかりしていた仕事人間であったと言われている。東京の地下鉄丸の内線の茗荷谷（みょうがたに）に近いところに住み，書斎は資料で埋まっていた。彼の職場としての事務所は，日比谷公園に近いところにあり，内外政策研究会（大来事務所）を持っていた。この事務所は，自由人としての大来佐武郎を象徴するもので，民間外交官としては立派なものであったと言えよう。彼は，第二次世界大戦をじっくり観察した官僚，経済学者，世界人であった，と同時に総括的に言えば，外交官であったし，また専門外交官の役割を果たした人物であった。彼の世界と日本への貢献は，歴史に残しておくべきことである。

（生誕地）大来佐武郎は，大正３（1914）年11月３日，旧満州の大連市で，父修治，母はなの３人兄弟の３番目として生まれた[2]。父は「遼東新報」で記者として働く。父の先祖は，三重県松坂市にあり，東京に出て早稲田大学に学ぶ。昭和２年に大来佐武郎は，大連から東京に帰国し，府立一中（現日比谷高校）に学び，昭和９年に東京帝国大学工学部電気学科に入学した。彼は，電気の研究の傍ら，現在の組織学会を作った馬場啓治先生の経済学に興味を持ち，システム分析，自然科学や技術を背景にした経済学に関心を持ったと述べている[3]。卒業後，逓信省に入省したが，高文試験（現在の公務員上級試験）について知らなかったために待遇に格差があることを知らなかった。そのためノンキャリアーであった。しかし東海大学設立者の松前重義が当時上司で，法科出身の官僚が昇進が早いことに対して異を唱え，待遇改善を求めたと記している[4]。人生に対して実直である。結婚相手は，当時の電電公社総裁の梶井剛の二女寿子であった[5]。

（知識や情報を求めての社会漂流）ここでの社会漂流は，尊敬できる恩人との出会いの旅であった。今の民主主義社会の時代には考えられないことだが，昭和初期には軍国主義で知識や情報が制限されていたり，禁止されていたので何が正しいのか良く理解できなかった。情報や知識が自由に溢れている現代の無関心とは大いに違う。無関心を装いながらの関心であったから真剣だ。本当のことを求めていたのだ。大来佐武郎が府立一中に入学した1931（昭和６）年に，奉天（今の瀋陽）での柳条溝の鉄道爆破事件の満州事変の勃発，次の年の五・一五事件で

の犬養毅首相の暗殺，1933年の日本国際連盟脱退，1934年にドイツのヒットラー政権の成立と目まぐるしく変転する世界にあり，日本は軍国主義にまっしぐらと言った社会状況であった。このような社会状況の中で大来佐武郎は，職場では先進諸国の電気事業の実態調査，海外の文献，専門雑誌等を読み，報告書を作成する仕事であったが，軍国主義の方向がどういうものかに疑問を持ち社会漂流，すなわち社会勉強に積極的であった。それは本当のことを求めていたからだ。昭和14年に時代を担う有能な人材育成のために設立された昭和塾に行き，多くの塾生と交流，特にその副塾長・平貞蔵に師事，しかもこの塾の経費は全額，会社経営者の小林采男が負担していたことを後で知ったと記されている[6]。多分このような正しい知識のための研究会に寄付するような行為が人を育てることを知ったことから，彼の人生がやはり奉仕的であったことでうなずける。昭和14年６月には中国政策を研究する興亜院の連絡部のある北京に赴任，そこでも真剣に北京木曜会で勉強をした。この積極さは，日本を何とか正しい方向に向けたいという考えの現れである。北京滞在中に，戦後日本を主導する人物，愛知揆一，東畑四郎，佐々木義武，大平正芳，伊東正義と親しく交流し，多分敗戦後の日本復興のあり方について議論していただろう[7]。昭和17年に帰国し，大東亜省に勤務。しかし敗戦を確信するようになり，昭和20年７月には日中戦争不拡大を主張し，また満州国のあり方で東条英機と対立した石原莞爾を山形に訪ね，敗戦を予想していた石原から戦後の対策について聞き，さらに秋田県横手に疎開していた石橋湛山を訪ねている[8]。このことは当時の軍国主義の時代にあっては身の危険を覚悟のことと思う。大来佐武郎の尊敬できる恩師は，松前重義，馬場啓治，平貞蔵，中江丑吉（なかえうしきち，中江兆民の子息で中国研究者），橘樸（たちばなしらき，遼東新報論説主幹）などであったと記している[8]。彼は，敗戦を予見していたので昭和20年８月16日に，軍部の追求を避けるために「日本自活方策研究会」をたち上げる準備をしていたが，15日に敗戦なったので急遽「戦後問題研究会」に名称を変え，最初の研究会を開いたのであるからその指導的役割に対してやはり賛美を送りたい。日本の戦争遂行に対していかに問題があるか真剣に考えていた証である。

（海外視察の旅と日本最初の経済白書の作成）大来佐武郎には二回の象徴的な海外視察の旅があった。このことは日本の進路にとって非常に重要と考えられる。その前に彼の「私の履歴書」（後に『東奔西走』として出版）を読んで感心することばかりだ。敗戦後の昭和22年に日本最初の経済白書『経済実相報告書』を執筆・出版したのであるからだ。その当時の社会情勢からこの白書を出そうと言う意志に驚嘆する。この白書作成に当たって日本経済全体の理解が進んだことは確実である。その白書で提示した日本経済の実態と比較し，日本経済をより豊か

にするための視察旅行がやってきた。昭和25年春に，経済安定本部から２名の海外視察が認められ，その中に大来佐武郎が入っていた。この海外視察が彼の第一目の世界を知る視察の旅であった。昭和25年４月14日に羽田から飛び立って五ヶ月間の海外視察である。ハワイ経由でワシントンに到着，約二ヶ月間 CEA（大統領経済諮問委員会）で経済情勢の分析，総合政策の立案，大統領年次報告の作成のあり方を学ぶ。彼は「ついこの間まで敵国であったはずなのに，アメリカ人はたいそう気持ちよく接してくれた」(10)と述べている。さらに CEA でユダヤ系でナチに追われて米国に亡命していたゲルハルト・コルム博士にお世話になり，彼が「1960年のアメリカ経済」と言う10年後の経済見通しの報告書を作る作り方を学び，その後日本にも彼を招待し，日本の経済白書の作り方を教示してもらい，日本の経済白書がコルム方式を採用するようになったと述べている(11)。アメリカ見学を終え，ニューヨークからヨーロッパに飛び立つ日の朝に，朝鮮動乱（昭和25年６月25日）が勃発したと知ったと言うのであるから昭和25年６月26日の現地日付であろう。彼は米国での体験を振り返って，「……一日十ドルという今日では考えられない貧乏旅行であった。一流レストランに行く余裕などがあるはずがなく，どの国でも大衆食堂に入った。アメリカで初めて食い放題のバイキング料理というものを食べて，たいそう感激したことを記憶している。しかし，私も若かったし，張り切っていたので，疲れは感じなかった」(12)と述べており，日本のためにという気合いを感じる。ヨーロッパではイギリス，フランス，西ドイツ，ベルリンを視察。イギリスではホテルで日本軍の捕虜になった人から散々な皮肉を言われたようだ。この海外視察の旅ではまだ日本の大使館が無い時代であったので，彼はすべてのことを自分でしなければならなく，国家が正常な形で大使館や領事館があることの意味を痛感したに違いない。そして「物は徹底的に破壊できても，技術や組織力や勤労精神などの人的能力は破壊できないということであった。この発見は，日本の復興を考えるとき，大きな希望につながった。」(13)と述懐している。しかしながらこの海外視察は，彼のグローバリストへの道に繋がって行くのである。

第二回目の海外視察の機会は，海の向こうの米国ロックフェラー財団からのもので，昭和32年９月に郵便で招待状が届いた。何故招待されたかの理由について詳しく語っていないので予想の範囲を出ないが，ロックフェラー財団は，大来佐武郎の戦後の日本経済政策に対する執権，経済白書の作成，敵を作らない人柄，そして英語力を見て，未来の日本の指導者と分析したと考えられる。その招待状に書かれている条件は，「世界中どこでも好きなところへ，ミセスを連れて行きなさい。報告書の類はいっさい不要です」(14)となっていた。そしてロックフェラー財団から「提供される費用は約一万ドル。当時は旅行者や奨学生などの一日の生活費はだいた

い10ドルだったから，これ以上はない好条件であった」[15]と記されている。婦人同伴で昭和33年4月16日，第一回目の海外視察から8年目に羽田からカナダに飛び，米国，中南米諸国，ヨーロッパ諸国，エジプト，インド，タイの順で23カ国を訪問し，各国の経済官庁，大学，国際機関などのエコノミストと意見交換をして来た。特に英国ロンドン大学のG.C.アレン教授が「イギリスの経済は競争過少の経済，競争の足りない経済である。政府の政策はもっと競争的要素を経済の中に導入することが大切だ。日本の経済は，自分の観察では競争過多な経済である。もう少し協調，コーデイネーションの要素を経済の中に導いた方が日本経済は相対的に能率をあげるのではないか」と言う示唆に自分のこれまでの考えと同じであったと述べている[16]。昭和33年4月16日から9月13日の約5カ月の海外視察旅行であった。この体験が次の日本の「所得倍増計画」の策定に結びつき，ちょうど日本経済も成長期にかかっていたので新たな経済政策の展開の「新長期経済計画」となった。この計画が，大来佐武郎と下村治との間の経済成長率論争になり，高度成長を主張した下村治の方に有利な経済が展開されたことは有名な話である[17]。

この論争の教訓は，自由に論争が展開できたこと自体にあり，理論や計数分析はあくまでも実際の経済活動とは異なることを明示したことである。それにしても大来佐武郎は，下村との経済成長率論争にせよ，それまでに自信を持たせてくれたのはやはり海外での経済学者たちの議論からついたものである。これら一連の経済成長の実現と経済政策の成功は，経済成長論争や所得倍増計画の論争があったにもかかわらず，自ら多くの専門家を主導し，政府公認の経済審議会を自ら発案し，作ったことは彼の功績であると同時に，後輩のわれわれは彼の真剣さに感謝しなければならない。昭和37年に経済企画庁総合開発局長に発令，次に事務次官への昇進かと思われたが，別の人が発令されたので昭和38年11月1日に経済企画庁を退職した。東京オリンピックの開催が昭和39年であったので直前の退職，そして日本の先進国入りも昭和39年であったと言われていたので若干心惜しかったと思われる。にもかかわらず彼の戦後一貫した実績が次の日本経済研究センター理事長就任となり，民間エコノミストと世界的なコンサルタントという幅広い活動，彼の活動の広がりがその後のグローバリストへの道に繋がって行くのである。

二，日本最初の国連職員としての大来佐武郎

彼が調査課長として五年間勤めた経済安定本部が，ちょうど吉田茂政権になってそれをより

小規模の経済審議庁に改組した機会に，そこの調査課長を後輩の後藤誉之助に譲ることを考えたのであろう。しかし単なる凡人では次の職を直ぐには見つけられないであろう。多分彼は，アジアに関心を持ち，アジア経済の発展を考えていたので，第一回目の海外視察の帰国間際にタイの国連機関エカフェ（ECAFE，アジア極東経済委員会）を訪問しており，そこのロカナサン事務局長（インド出身の経済学者）に会っている。インドは日本の起こした戦争に対して全ての責任が日本にあるとまで言い切れないところがあると言う感情もあり，そのことから日本の大来佐武郎にも好意的であったと思われる。タイのエカフェに赴任する前の大来佐武郎の体験を考察して置こう。

昭和26年２－３月，パキスタンのカラチで開催されて第七回エカフェ総会にも彼は，オブザーバーとして外務省からの以来で出席していた。ちょうど日本が米国の占領下にあり，まだサンフランシスコ条約締結前であったために日本からの出席はオブザーバーの資格であったにもかかわらず，GHQのダイバートが日本政府からせっかく代表団として来ているので発言の機会を与えたらどうかという発言をして，パキスタンのカレー議長が発言の許可を出したらソ連が否と発言，英国なども反対して結局「ミスターチェアマン」の一言で日本側の発言が終わったとして有名な話である[18]。当時まだ日本は敗戦後で，米国の支配下にあった状況の国際舞台での状況を知る良い例である。また国際政治の舞台で米ソの政治的駆け引きをかいま見る良い例だ。ただこのパキスタンでの大来佐武郎の体験でラホールからカラチまでの列車の中で会った警察隊長が「我々はあなた方に非常に感謝している。アジアのたくさんの国が日本のおかげで独立できたのだ」やラホール大学の法学部長は「日本人は張り付けにあったキリストのようなものだ。自分が犠牲になってアジア諸国の独立を助けた」と記されている[19]ことから，日本の今後のアジア外交のあり方を直に学んだと思う。東北アジアの中国，韓国，フイリッピンなどとは全く反対の感情である。

第七回のエカフェ総会が昭和27年２月にビルマのラングーンで開催され，そこにもオブザーバーで出席した。この時は前年より少し状況が変わっていた。それは前年９月８日，サンフランシスコでの講和条約が49カ国によって調印され，27年４月に発効し，日本の独立が間近な状況であった。そのためエカフェ事務局長ロカナサン氏が「二か月後に日本が晴れて独立国になることを織り込んだ非常に好意的な措置を講じてくれた。正式な手続きでは，その年の六月に予定されていた経済社会理事会で日本をエカフェ地域に含める決議をし，翌年のエカフェ総会で加盟国となる承認を得なければならないが，それでは日本の加盟が一年遅れることになる。

ロカナサン事務局長は，日本が六月の経済社会理事会の承認と同時にエカフェのメンバーになれるよう特別措置を総会に提案してくれた。この提案に対して，フイリッピン代表は“アジアの真珠といわれるマニラを徹底的に破壊した日本を国連機関の裏口からしのび込ませるとはけしからん”と反対したが，結局好意的便法が承認されて一年早く準加盟国となった」[20]と記している。このロカナサン事務局長の配慮に加えて，次に大来佐武郎にエカフェで働くようにとの勧誘になったのである。やはりロカナサン事務局長の大来佐武郎への友情，大来佐武郎の人格と国際感覚の判断，日本の将来のアジアでの役割などを考え，大きな配慮をしたものと考えられる。

昭和27年４月７日，単身赴任でタイ・バンコックにあるエカフェ本部に日本初の国際公務員としての大来佐武郎の誕生である。エカフェ（昭和四八年にエスカップ，ESCAP＝国連アジア太平洋経済社会委員会に改称）では貿易と資金部に配属，経済分析課長の役割を果たし，そこの部長は米国人で，インド人，イギリス人，フイリッピン人と一緒に仕事をした。日本から戦後初めての国際公務員になったのであった。しかし隣席のフイリッピンからのロメロは３ヶ月も一言も口をきかなかった冷たい雰囲気に耐え，英語の訓練，そして仕事，また暇があれば東南アジアの実地視察を行い，ゴルフの練習など多くの収穫を得たのである。ある時に聞いたことだが，若い時には自分の様な経験を積むことは日本のために是非必要だが口癖であったことを思い出す。約２年間のバンコックでの生活で国際的訓練を終え，28年12月に帰国し，その帰国に際しての送別会でロカナサン事務局長から「ミスター大来はエカフェに来て英語を勉強し，短期間で帰ってしまうのはけしからぬ。……エカフェの職員が日本を訪れた時には良く世話をするように」と言われたと記してある[21]。実直な大来はそれを実行したとも記されている[22]。この経験は大来佐武郎のアジアに対する日本あり方を形成したと同時に，次のステップであるグローバリスト誕生に大きな意味で繋がっていく。

三，日本最初の地球環境問題の警鐘を鳴らした大来佐武郎

昭和37年に経済企画庁総合開発局長に発令，事務次官には別の人が発令されたので昭和38年11月１日に経済企画庁を退職した。昭和39年４月１日発令で日本経済研究センターの理事長に就任。このことは戦前，戦後を通じての官庁エコノミストの専門家不在に対する彼なりの専門家育成の実績を見てからの，次に自分を民間エコノミストへの転身と世界的な活動を目指しての決断だと見てとれる。ちょうど昭和39年は，東京オリンピックであり，日本の先進国入りも

同年であったので良いタイミングであったと言えよう。日本経済研究センター理事長就任後，大来佐武郎の活動は，国際的な広がりを見せ始める。昭和40年５月国連開発計画委員会（ティンバーゲン委員会）委員，昭和43年11月世界銀行国際開発委員会（ピアソン委員会）委員，昭和44年６月ローマ・クラブ常任委員，昭和48年３月海外経済協力基金総裁，昭和48年10月日米欧委員会常任委員，昭和50年４月日印調査委員会日本委員長，昭和51年日豪調査委員会日本委員長などに就任した。その中でも特に，昭和44年６月ローマ・クラブ常任委員に就任したことが地球環境問題の警鐘を鳴らすことになった大来佐武郎である。この委員に就任した背景には，自らの経済政策が，産業の育成にあった政策中心であったのに対して，その産業が環境問題を発生させていることへの反省が含まれていると見て良いだろう。

大来佐武郎がローマ・クラブの創設者ペッチェイ博士に最初に会ったのは，昭和44年パリで開催された旧知のOECD科学局長アレキサンダー・キングの事務所であったと述べている。ペッチェイ博士は，大木佐武郎に「私たちの子供の世代により住みよい世界をのこすためには，われわれは何をなすべきだろうか」[23]と問われ，自分はその言葉に感動したと述べている。彼の先見の明が的確であった証拠である。ローマ・クラブの最初の報告書『成長の限界』は衝撃的で世界的波紋を醸し出し，バラ色の未来を描いていた多くの産業界，学会の人々に衝撃が走った。確かにそれまで経済成長が高ければ高いほど良いと言った論調がまかり通り，環境問題に目を向けていなかった時代であったからだ。ローマ・クラブがかけがえのない地球，宇宙船地球号，生活の質，持続的経済成長などの新奇な概念を世界に発信させた功績は高く評価されなければならない。

筆者がローマ・クラブから新プロジェクト「人類の目標」[24]に参加要請を受けたのは，大来佐武郎が日本経済研究センター会長で海外経済協力基金総裁の時であった。日本チームの企画，研究員の編成など極めて専門的な目標づくりであったので真剣そのもので参加した。ローマ・クラブ会長のペッチェイ博士にお会いし，本当に魅力的で，地球環境問題解決に真剣であり，一緒に仕事するのに満足した気分であった。大来佐武郎博士からお会いしたいという連絡があり，海外経済協力基金総裁室に案内されて，日本を代表して研究プロジェクトを進めてほしいとの言葉があり，やはりこんな大人物に言われたことは実現しなければならないと決意を新たにしたことを思い出す。昭和50年５月に米国二百年祭を記念するローマ・クラブの年次総会と大会が米国ペンシルバニア州のフラデルフィアで開催されるので参加してほしいという招待状が届き，驚きの参加となった。私の参加費用は，The First National Bank of Pennsylvania, The Frank-

lin Institute, IEEE からのものであった。当時日本人は五百ドルしか海外に持ち出せない時代であったが，この費用の提供にはさすが大国と驚いたものだ。

筆者はその会議で「日本の国家目標」を発表し，国際的デビューを果たしたのであった。真剣に練り上げた草稿を準備しての参加であったので自信をもって発表し，質疑応答にも応じることができたのでうれしい気分であった。その夜のパーテイで大来佐武郎博士から賛美の言葉をいただき，恐縮したものだ。ただ心の中では大来佐武郎博士が若い頃の国際公務員になっていたこと，若い日本人が世界で活躍することが日本の平和に繋がること，どしどし世界の国際会議に出て自分の研究を発表するような人物になることを望んでいたので世界で活躍できる人物になろうと決意したものであった。この会議でローマ・クラブは初めてゼロ成長ではなく「持続的経済成長」を唱え，そのことが雑誌『タイム』や新聞『ニューヨークタイムズ』に載ったので現地で購入してきた。この会議でカーター大統領の代理で出席した副大統領ロックフェラー氏の演説を直接聞くことが出来たり，フォレスター博士（MIT），メドウズ博士（ダートマス大学），テイラー博士（カナダ・クイーンズ大学），ポール・リン博士（マックギル大学），デ・ファイヤー博士（カナダ環境省），ジャクアリベ・マットス博士（リオデジャネイロ大学），ハンシン・リン博士（カリフォルニア州立大学ソノマ校），ラズロー博士（国連訓練調査研修所）などと直接意見交換をし，その後も継続的に研究交流が続いている。この会議参加以後，大先輩としての大来佐武郎の意志を継ぐつもりの学会活動に切り替え，研究生活を心がけている。そのことから最低でも毎年数回の国際会議での発表に精をを尽くしている今日であり，アフリカを除いた世界各国に友人が出来たのもやはり大来佐武郎の功績を見習ったからである[25]。

大来佐武郎は，ローマ・クラブの地球環境問題の解決のための活動を通じて国家中心から地球全体の地球社会を構築するためのグローバリストに活動の幅を広げることになる。すなわち先進国の環境破壊と経済の貧富の差が問題となる南北問題が関心の核となり，人類の未来と地球全体の問題が視野に入ってきたのだ。新たな意味でのコロンブスの登場となって大来佐武郎がやって来たことになる。彼は，昭和59年のペッチェイ会長の死後も，ローマ・クラブの提起した環境問題解決のために動き出し，国連環境会議の設立，さらに国連に環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）の設立，この委員会の報告書『われら共有の未来』として持続可能な開発を訴えたブルントラント・レポートとして昭和62年に結実して行くのである。彼はその結果，日本のグローバリストから世界全体から支持されるグローバリストに昇華したと結論できる。彼の仕事は，次にブラジルでの地球サミット（国連環境開発会議），世界野生

生物基金日本委員会などの地球の問題に関わった。

四，日本を代表する外交官としての大来佐武郎

大来佐武郎の専門外交官としての仕事は，外務大臣になった昭和54年11月９日，64歳に始まる。外務大臣への就任は突如して始まった。がしかし交友関係から見れば，なるべくしてなったと言う感じである。今風に言えば大来佐武郎は帰国子弟であり，最初から国際感覚を持って育ったように思われる。彼は，もの心ついた頃に中国・大連から帰国し，旧制中学受験をしたのであった。大学を卒業して逓信省に入り，また中国・北京に昭和14年に対中国政策担当する機関の興亜院華北連絡部で働くのである。昭和17年に帰国し，興亜院と外務省亜細亜局が合併した大東亜省総務局調査課に勤める。戦後は経済安定本部，国連エカフェ勤務，経済審議庁（後に経済企画庁に改組）勤務，ローマ・クラブ常任委員などのどこを採っても外交官としての役割である情報収集，情報分析，高度な知識の収得，外国事情の理解，政策調整のための外国との交渉に携わって来たので専門外交官でないにしても，ほぼそれに等しい外交官であったと規定しても何ら問題が発生しない。ローマ・クラブや国連関連の多くの委員会委員，そして海外協力基金総裁の後に，新自由クラブから政治家になろうと参議院選挙に出馬，落選となったが，しかしその落選が彼を真の意味での専門外交官の道に進むようになったのである。その経緯について次ぎの様に記されている。すわち「海外協力基金総裁の四年間の任期が終わりに近づいた昭和52年２月，大来は二期目を勤めると思っていた大方の予想を裏切って，唐突に辞意を表明した。……それが参議院議員選挙への出馬であった。周囲の多くの人々の眼には，極めて大胆な決断に見えたが，本人にとっては，至極当たり前の選択をしたに過ぎない。これまでの国際舞台の経験を国会議員として国政の場で生かし，日本の経済外交を確固たるものにしようというのだ。果たして大来に適した道だろうかと多くの人が心配したが，大来は誰にも相談せずにこの道を選んだ。今度も“わが信じる道を行く”新たな世界を求めてのゴーイング・マイ・ウエーである」[26]と。

大来佐武郎は，62歳で参議院議員選挙に落選，その後昔の昭和塾を思い出したのか若者を育てるためのフォーラムを開催していた。昭和54年11月８日夕方一本の電話が鳴る。それは大平内閣の外務大臣就任要請の電話であった。先に交友関係からなるべくしてなったと書いたが，戦前の興亜院北京時代の友人，伊東正義，大平正芳，佐々木義武等の中で，大来佐武郎外務大臣就任の発案は，伊東正義であったと記している[27]。外相就任の彼がやるべきことは決まって

いた。彼は常日頃から日本外交は八方破れの外交だとか総合安全保障的な外交をすべきと言っていたからだ。それは資源のない日本が世界第二の経済大国になれたのもエネルギー，食糧を海外から輸入し，海外依存度が高い日本が外国と敵対的でない賢明な外交が必要であり，また紐付き援助でなくアンタイドローンを増やすべきと言う信念を持っていたからだ。彼はその外交政策を見事に遂行した。大まかだが外相就任直前にイランで「米大使館人質事件」が発生し，米国のイランとの国交断絶までになった。日本はイランからの石油依存が高く米国との狭間で揺れ，米国から日本が米国の友人では無いのでは無いかと言われ大変困った状況に落ち込んだ。そこで彼はこれまでとは異例の記者会見をし，米国の誤解を解き，ニューヨークタイムズが「日本に感謝を，そして油を」と言う社説を載せたのであった[28]。またソ連のアフガニスタン侵攻に伴うモスクワ・オリンッピクのボイコットという難問を解決したこと，日米自動車摩擦問題に関わる難題の調整と日米会談の成功，日中関係の改善，昭和55年６月12日の大平首相の死去に伴うベネチア・サミットへの代理出席の履行など数々の難題を解決していった実力は，他に代え難い外務大臣の責務を果たしたと言える。昭和55年７月17日の鈴木内閣の成立までの252日，約８ヶ月間の外交官としての仕事の能力は見事なものであった。大来佐武郎の実力を発揮したことに間違いない事実であった。

元ハーバード大学教授で，その後米国国務省情報調査局日本担当分析官のロナルド・モースは，「大来佐武郎――日本で最初のグローバリスト」と題して，次のように記している。つまり「1979年11月初頭に大来佐武郎が外務大臣に任命されたことは，海外における多くの氏の友人・協力者に，驚きと喜びを持って受けとめられた。外相に民間人が起用されたのは過去20年以上にもわたってなかったことであるが驚かれたとともに，同氏が日本で最も卓越し，学識ある民間大使の一人として著名であったことが，歓迎されたのである。大平正芳総理が大来氏を外相に起用したのは，氏のエコノミストとして，また対外的スポークスマンとしての能力への信頼ばかりでなく，日本が，国際経済秩序のなかで新たな，より積極的な役割を果たそうということを認めたことを示している。」[29]と記し，日本を代表する外交官として優れた能力に人望の厚さに驚嘆した賛意を示している。筆者は，世界的な人物の紹介やアジア・太平洋に関する国際会議に参加要請を受けたり，またアジア・太平洋の諸問題に関心を向けるようになったことにも感謝している。

五，大来佐武郎の日米関係に果たした役割

日本はポツダム宣言を受諾し，全面降伏をした後，米国は日本全土を占領したが，今から考えるとソ連の介入によって日本が分割統治されなかったことを幸いとしなければならない。もちろんそうした背景には米国の世界戦略があったことは事実であり，朝鮮戦争が自由主義陣営と共産主義陣営の戦いであったことからも分かる。大来佐武郎は朝鮮戦争の勃発を最初の海外視察時のニューヨークで知ったと述べている。昭和28年のサンフランシスコでの講和条約締結後，日本は独立したが，日米安全保障条約に基づき日本の防衛は米国主導になってきた。これは日本側からみれば，その条約を通じて米国の日本に対する統制に見えるが，また別の視点から見れば，日本の経済復興にとってそのことが好都合でもあった。日本の経済復興が著しくなってきた昭和40年代半ばから日米の間の貿易摩擦が激しくなってきた。日本からの集中豪雨的な貿易による米国側の貿易収支の悪化によって米国内での失業率の増大は，原因が日本にあるという主張で，日本の保護貿易をまた再度のペリーの黒船の如く，日本市場を開放すべきと言う主張になった。

大来佐武郎が，大平内閣で外務大臣になった昭和54年の日米間の主要な問題は，イランやアフガニスタン問題，自動車問題，電電公社問題などが山積していた[30]。イランやアフガニスタン問題は，日中や日韓問題に比して日本から遠い出来事で関心をひくものではなかったが，イランの米国大使館員人質事件やアフガニスタンへのソ連軍の侵攻などは一気に日米関係の問題になった。つまり日本がイランから原油を輸入していたことがそのまま続けることになれば，米国の思惑であるイランを窮地に追い込めなくなり，結果的に日本がイランを背後から支援したことになり，米国としては許されない無神経な行動ということになる。この股裂き状態の三角関係を大来は，それまでの日本の原油輸入量を米国が保障する条件を引き出すことによって米国を説得し，当時のバンス国務長官の誤解を解く説得になり，結果的にニューヨークタイムズが「日本に感謝を，そして油を」と言う社説を載るようになったのも大来外務大臣のダイナミックな行動の成果であった。アフガニスタンへのソ連軍の侵攻の時などは，欧州諸国との連携を図るために議会開催時の狭間を利用して欧州諸国の首脳とホテルのロビーで話し合う程の説得行動を取るなどそれまでの外務大臣では出来ない積極外交と外交的成果を上げた。自動車問題は日本製自動車の急激な輸出増で，米国が困っているというものだったが，米国の輸入規制強行派を説得するのに米国輸入業者は日本製自動車の品質が良いとするからで，米国自体が自由貿易に反しているのではないかと説得するなど冷静かつ論理的説得に成功している。電電

公社問題においても米国の要求した電電資材調達の完全自由化が出来ないことを説得し，日本の資材調達額の半分まで開放するという決着をつけるなど米国にとっても手強い外務大臣であった。

以上のように大来佐武郎が外務大臣になって日米間の諸問題がぼや程度で済み，むしろ日米間に真に友好関係を増強させることができたのも，大来佐武郎の長い間に培ってきた世界的な交友関係，外交能力によることが大であった。さらにカーター政権の多くの構成メンバーの中に，大来佐武郎の友人，知人が多くいたことも大来外交が成功を納めたことになる[31]。結局，国家関係も基本は友情と尊敬しあえる人間関係によって作られるという見本を大来佐武郎は教示したのであった。受賞は，マグサイサイ賞，ビンタン・マハプトラ・アディブラダナ勲章，功労勲章大功労十字星賞付大大綬賞，国際理解賞，オーナリー・コンパニオン・オブ・オーダー・オブ・メリット・オーストラリア勲章，ブリタニカ賞，勲一等旭日大綬章，ガンジー平和・軍縮・開発賞などがある。

まとめ

日本の歴史を再考察してみれば，その時代時代に先駆者がおり，歴史が作られてきた。明治維新の先駆けとしてジョン・万次郎の功績は大であった。彼のグロバーリストとしての実体験が多くの若者に刺激を与え，明治の偉大な人物を作り出した。大来佐武郎はあの軍国主義の時代に生き，実体験から反省し敗戦を契機に日本の国家経営を意識して，新しい国家の経営を民主主義と平和主義に基礎を置き，新しい日本の建設に邁進した。現在のグローバルな時代に彼らの活動を研究してアジア太平洋の時代の日本の進路を決定する参考にできることが多いと言えよう。

註と引用文献

(1) 大来佐武郎「経済危機の実相と石炭増産」『技術・資源・経済』白揚社，昭和24年，298－299頁。この「経済危機の実相と石炭増産」は，敗戦の昭和20年８月から僅か一年後の昭和21年11月に発表されたものである。彼の戦前の軍事政権に対する暗黙の批判と，敗戦後に日本を正そうという意欲が感じられる。

(2) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，７頁。この本は，日本経済新聞社に掲載された「私の履歴書」に加筆したものである。またその英語版 *Japan's Challenging Years,* Australia-Japan Research Center, 1983が出版されている。さらにまたより詳細な大来佐武郎の全貌が分かる著書も出版されている。参照，小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年。

(3) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，19－21頁。

(4) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，26頁。
(5) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，38頁。
(6) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，27－33頁。
(7) 小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，27頁。
(8) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，53－54頁。
(9) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，20－38頁。
(10) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，93頁。
(11) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，93－94頁。
(12) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，96頁。
(13) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，96－97頁。
(14) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，115頁。
(15) 小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，165頁。
(16) 小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，170頁。
(17) 大来佐武郎は，この経済成長率論争で実際には下村の主張した成長率に近かったことを認め，「三つの誤り」として発表している。その誤りの第一は，日本経済の戦後の急速な成長が，戦争からの回復過程といういわば復興要因のみによって支えられてきたのではないということ，第二は，もし成長が高ければ投資貯蓄バランスがくずれ，物価が騰貴し，また国際収支が破局を招くだろうとしたこと，第三は，産業構造の変化に対する判断が甘かったこととして認めている。参照，大来佐武郎「三つの誤り」『所得倍増計画の解説』日本経済新聞社，昭和35年，５－８頁，大来佐武郎『経済外交に生きる』東洋経済新報社，1992年，18－19頁。
(18) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，97－100頁。
(19) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，97－99頁，小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，130－133頁。小野善邦の著書の中で，大来佐武郎がカラチからラホールへの帰路で警察隊長ユスク氏の家の夕食に招待されて歓談し心からの歓迎を受けたと記している。多分大来佐武郎はうれしかったと同時に，日本に対するパキスタン人の感情を知るために立ち寄ったと思う。
(20) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，100頁。
(21) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，106－107頁。
(22) 小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，146頁。
(23) 大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年，126－127頁。
(24) E. ラズロー他編『人類の目標』（大来佐武郎監訳，伊藤重行他訳），ダイヤモンド社，1980年（原著，E. Laszlo, et al, *Goals for Mankind,* NY: E. P. Dutton, 1980）
(25) 大来佐武郎の精神を受け継ぐために，学問の基礎作りとして拙著『システム・ポリティックス』勁草書房，1987年を出版，それに基づいてアジア太平洋研究プロジェクトを組織化し三つのプロジェクトを完成させた。またローマ・クラブ福岡大会も実施した。
(26) 小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，298頁。
(27) 大来佐武郎『エコノミスト外相の二五二日』東洋経済新報社，昭和55年，３－４頁。
(28) これは日米関係が暗雲に包まれていた時に大来外相の異例の記者会見で解決した優れた功績であった。参照，*The New York Times,* April 22, 1980，大来佐武郎『エコノミスト外相の二五二日』東洋経済新報社，昭和55年，89頁。
(29) 大来佐武郎『エコノミスト外相の二五二日』東洋経済新報社，昭和55年，224頁。
(30) 大来佐武郎『経済外交に生きる』東洋経済新報社，平成４年，15－56頁。
(31) 大来佐武郎がカーター政権での友人，知人はカーター大統領，モンデール副大統領，バンス国務長官，ブラウン国防長官，ブレジンスキー特別補佐官，クーパー国務次官，キッシンジャー元国務長官など15名にも及ぶという指摘がある。大来佐武郎外務大臣は，グローバリストそのものであったのでお互いの利害を交渉

における敵対からではなく友好から導出できた優れた外交官であったと言える。参照，小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年，324－325頁。また大来佐武郎と長いつき合いのあった原覚天は「大来さんという人命令しないでも仕事を周りの人がやってくれるんです。黙っていても下の人がお膳立てして，仕事が早いんです。余り自分の事大事には考えない人です。」と述べており，やはり自然と尊敬される20世紀を代表する人物であったのだ。参照，原覚天『ある老学徒の遍歴』日経事業出版社，昭和59年，225頁。

参考文献

大来佐武郎『技術・資源・経済』白揚社，昭和24年。
大来佐武郎『経済観測の知識』ダイヤモンド社，昭和24年。
大来佐武郎，原覚天『アジア経済と日本』岩波書店，昭和27年。
大来佐武郎『所得倍増計画の解説』日本経済新聞社，昭和35年。
大来佐武郎『有限な地球と日本の将来』ダイヤモンド社，昭和48年。
大来佐武郎『大来レポート』国際開発ジャーナル社，昭和51年。
大来佐武郎『エコノミスト外相の二五二日』東洋経済新報社，昭和55年。
大来佐武郎『東奔西走』日本経済新聞社，昭和56年。
大来佐武郎『日本へ高まる風圧と期待』国際開発ジャーナル社，昭和59年。
大来佐武郎『日本官僚事情』TBS ブリタニカ，昭和59年。
大来佐武郎『国際問題の焦点と日本の対応』国際開発ジャーナル社，平成１年。
大来佐武郎『経済外交に生きる』東洋経済新報社，平成４年。
小野善邦『わが志は千里に在り－評伝大来佐武郎』日本経済新聞社，2004年。
宍戸寿雄・佐藤隆三編訳『世界経済の生きる道』サイマル出版会，昭和62年。
Saburo Okita, *The Developing Economies and Japan,* University of Tokyo Press, 1980.
Saburo Okita, *Japan's Challenging Years,* Australia-Japan Research Center, 1983.